

みやぎで歴史探訪

みやぎの歴史にふれる旅

東は豊かな漁場の広がる太平洋に面し、
西には蔵王・船形・栗駒などの山々を構えるみやぎの地理的特長は、
太古から現在まで様々な産業と豊かな文化を育てて来ました。
特に奈良・平安時代に「陸奥国」の国府・多賀城が置かれたことは、
東北の中心として発展する礎となりました。
2024年は多賀城創建1300年の記念すべき年でもあり、
脈々と流れ続ける「みやぎの歴史」にふれるよい機会でもあります。
数多くの史跡に眠る古代浪漫の夢から、
城跡に息づく伊達な文化まで、
知れば知るほど奥深い『歴史探訪』をお楽しみください。



多賀城創建記念
TAGAJO 1300th Anniversary
724-2024

多賀城創建1300年 724-2024

奈良時代、おおのあすむひと大野東人が多賀城を築いてから2024年で1300年。
これを記念して8世紀中頃に多賀城外郭に設けられた南門が復元されます。
多彩な記念イベントも開催されるので、
古代万葉の世界にタイムスリップしてみては？

「たがもん」は多賀城市観光協会のイメージキャラクター。多賀城南門をイメージして誕生しました！





みやぎは和歌の題材になる名所を指す

「歌枕」の宝庫でもあります。

『山家集』の西行法師や

『おくのほそ道』の松尾芭蕉らが、

多賀城の史跡や松島の絶景を

歌に詠んだといわれています。

今もその情景を残す歴史深き地で、

往時の風を感じてみましょう。

◆詳しくは/P.017

戦国武将として人気の高い伊達政宗公。

居城であり要害でもあった城郭の跡、

政宗公の参謀であり知略家として名を馳せた

片倉小十郎が城主だった白石城、

また、伊達家が守り伝えてきた

神社・仏閣などをご紹介します。

今につながる伊達文化の世界を堪能してください。

◆詳しくは/P.022



多賀城創建1300年

TAGAJO 1300th Anniversary

724-2024



多賀城創建記念

TAGAJO 1300th Anniversary
724 - 2024

多賀城は古代律令政府により陸奥国(むつのくに)の国府が置かれたところで、奈良・平安時代の東北地方の政治・軍事・文化の中心地でした。その遺跡は多賀城市北西部の丘陵上にあります。2024年は大野東人が多賀城を築いて1300年にあたることから「多賀城創建1300年記念事業」として多種多様な文化プログラムを展開しています。

「西の大宰府・東の多賀城」

多賀城と大宰府は、奈良時代の律令制度のもと朝廷の出先機関として、西海道(九州)と陸奥・出羽(東北)地域を治める役所としてほぼ同じ時期に機能していました。また、軍事の統括や、朝廷と緊張関係にあった蝦夷や新羅との外交の舞台として機能していたことが知られています。約1300年の昔から深い縁で結ばれている二つの市の交流をさらに深め、新たな文化を育てていくため、平成17年に多賀城市と太宰府市が「友好都市」となりました。
※多賀城市の友好都市は太宰府市に奈良市(平成22年)、山形県天童市(平成18年)を加えた全3都市

日本三大史跡

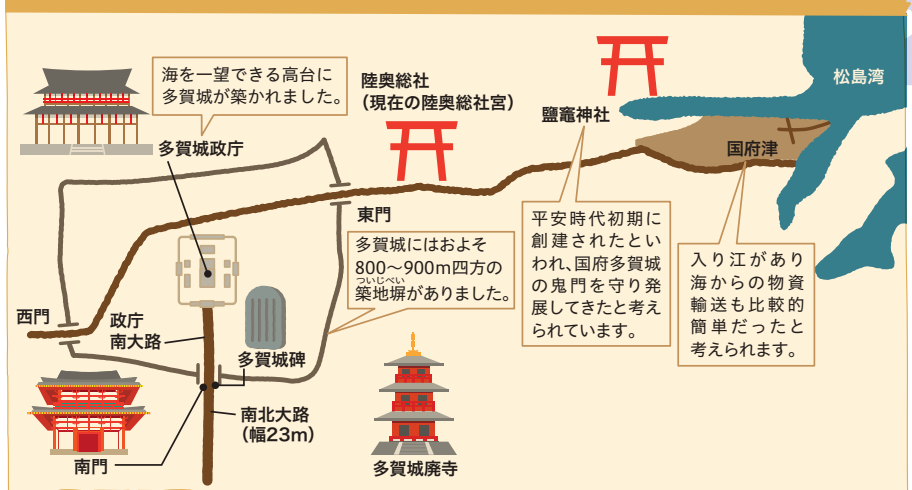
多賀城跡附寺跡は国の特別史跡に指定され、奈良の平城宮跡、九州の大宰府跡とともに日本三大史跡に数えられています。

福岡県太宰府市
(大宰府跡)

奈良県奈良市
(平城宮跡)

宮城県多賀城市
(多賀城跡附寺跡)

古代律令時代の多賀城と松島湾



東北の文化交流拠点であった
古代都市 多賀城

PROJECT—多賀城創建1300年記念事業—

つなぐ、つなげる。1300年。

多賀城の名は、「賀び多き城」と読むことができるように、東北の安寧を願ってつくられた城と言われており、宮城県の県名の由来の一つと言われています。「宮城のはじまり、東北のはじまり」ともいえるこの「多賀城」は、令和6年(2024年)に創建1300年という記念すべき年を迎えました。多賀城の創建以来の歩みを振り返り、先人たちの弛まぬ努力により、現在の東北があることに思いを寄せ、多賀城創建1300年を共に祝い、その喜びと感動を共有するプロジェクトを立ち上げました。

過去に学び、今を見つめ、未来を創造する。「つなぐ、つなげる。1300年。」

この基本理念のもと、宮城、東北の唯一無二の価値の創造と地域活力の一層の向上を目指し、多種多様な文化プログラムを展開しています。

多
賀
城

京を去ること一千五百里
蝦夷国の界を去ること一百廿里
常陸国の界を去ること四百十二里
下野国の界を去ること二百七十四里
靉靺鞨国の界を去ること三千里

此の城は、神亀元年、歳は甲子に次る
按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等
大野朝臣東人の置く所なり。
天平宝字六年、歳は壬寅に次る
參議東海東山節度使從四位上
仁部省卿兼按察使鎮守將軍
藤原惠美朝臣朝獺、修造するなり。

(国指定重要文化財「多賀城碑」碑文)

多賀城関連年表

時代	年号	出来事
奈良	710年	平城京に都をうつす
	724年	多賀城がつくられる(多賀城碑による)
	737年	大野東人、陸奥国から出羽柵に至る直路を開こうとする
	749年	陸奥守百済王敬福、小田郡(涌谷町)で産出した金を献上
	752年	東大寺大仏開眼
	759年	桃生城・雄勝城完成
	762年	「多賀城碑」建立 藤原朝鸞が多賀城を修造
	780年	伊治公咎麻呂が多賀城を襲い、火を放つ
平安	782年	大伴家持、陸奥按察使・鎮守将軍となる
	794年	平安京に都をうつす
	797年	坂上田村麻呂、征夷大将軍に任命される
	802年	坂上田村麻呂、胆沢城をつくり多賀城から鎮守府をうつす
	864年	源融、陸奥出羽按察使に任命される
	869年	陸奥国大地震、城下に津波が押し寄せる
	1189年	11世紀中頃 この頃以降、それまでの多賀城は維持されなくなる 奥州藤原氏滅亡
鎌倉・室町	1192年	源頼朝、征夷大将軍となる、
	1333年	北畠顕家、陸奥守となり義良親王を奉じ陸奥国府に赴く
	1573年	室町幕府滅びる
安土桃山	1590年	八幡氏、留守氏の所替えに従い八幡を去る
	1600年	関ヶ原の戦い
江戸	1603年	徳川家康、江戸幕府をひらく 伊達政宗「仙台城」入城
	1625年	伊達安芸宗重、天童重頼の娘婿となり頼長と名乗る
	1639年	天童頼長、涌谷伊達家に戻る
	1689年	松尾芭蕉「おくのほそ道」の旅で壺碑、末の松山等を見る
	1773年	多賀城市域の諸村「風土記御用書出」提出
明治・大正	1868年	戊辰戦争が終わり明治と改元
	1889年	多賀城村ができ、役場を市川の玉川寺に置く
	1893年	正岡子規、与謝野鉄幹、多賀城を訪れる
昭和・平成・令和	1943年	多賀城海軍工廠開庁
	1966年	多賀城跡・多賀城廃寺跡が特別史跡に指定される
	1998年	「多賀城碑」、国の重要文化財(古文書)に指定
	2024年	多賀城創建1300年

出典:「古今往来—多賀城人物伝」パンフレットより

多賀城の歴史

多賀城では長年の発掘調査により、旧石器時代から東北の政治・軍事の中心であった奈良・平安時代の変遷、『古代都市』を形成する過程や当時の人々の営みなども明らかにしてきました。また、都人の憧れを集めた「歌枕の地」としても知られています。その歴史を時代を追って見てみましょう。

多くの貝塚が発見！ 縄文時代

縄文時代、東北地方は今よりも温暖で、山の幸、海の幸に恵まれた場所でした。特に多賀城からほど近い松島湾沿岸には約70カ所の貝塚が集中して分布しており、東京湾や霞ヶ浦沿岸とならび 縄文時代の貝塚が密集する地域として知られています。日本最大級の規模をもつ里浜貝塚や西ノ浜貝塚、大木田貝塚のように長期間にわたってムラが営まれた、規模の大きな貝塚もみられます。縄文時代を通じて変わらなかった松島湾の自然環境が、縄文人の豊かな生活を支え続け、多くの貝塚を今に残しています。



東北に水田稲作が伝わる 弥生時代



多賀城市の大代地区には考古学史上に残る「櫛形貝塚」があります。今から約100年前、ここから出土した土器は、土器の底部に稲穂の圧痕が確認されたことから、水田稲作が行われていた弥生時代の土器であることがわかりました。この発見によって、東北地方にも弥生文化が伝わり、米作りを行っていたことが証明され、新たな東北史の幕開けとなりました。

北方の人々との交流 古墳時代

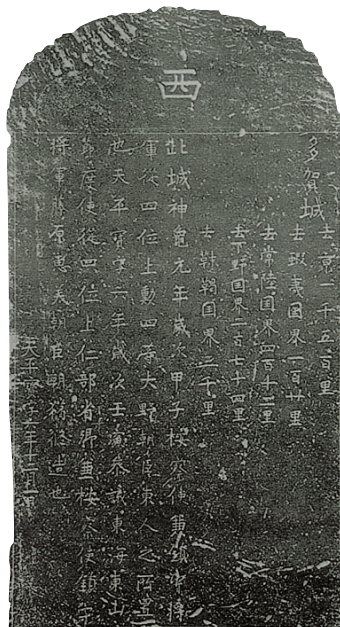
4世紀に入ると、多賀城では丘陵上や沖積地の微高地に堅穴住居をつくって人々が暮らし始めました。細長い自然堤防の縁辺部に東西約2.5km、南北0.7kmに及ぶ広大なものです。高崎地区では矢板を立て並べた水路が造成されており、高水準の土木技術を有していたことが知られます。5世紀になると、続縄文土器や黒曜石でつくった石器などの北海道系遺物が山王遺跡や新田遺跡から発見されており、多賀城周辺が北方の人々との交流拠点であったことがわかります。6～7世紀の古墳では、稲荷殿古墳や、大代横穴墓、田屋横穴墓が知られています。大代横穴墓の副葬品には装飾太刀などが供えられており、この地域を治めていた豪族の墓であると考えられます。



出典:「多賀城創建1300年記念特設サイト」より抜粋

724年 多賀城創建

律令に基づく統一国家が成立した奈良時代、都は平城京にうつり全国の国府が整備されていきます。「多賀城碑」によると多賀城は、神亀元年(724年)大野東人によって創建され、天平宝字6年(762年)藤原朝鸞が修造したと刻まれています。大野東人は奈良時代前半の武人で、陸奥鎮守将軍や陸奥按察使(あぜち=地方行政を監督)に任じられ、多賀城を拠点に出羽国への直路を開発するなど当時の東北の最高責任者として取り組みました。国府であり鎮守府(兵士の駐屯・監督所)でもあった多賀城は、古代東北の政治・文化の中心となっていきます。

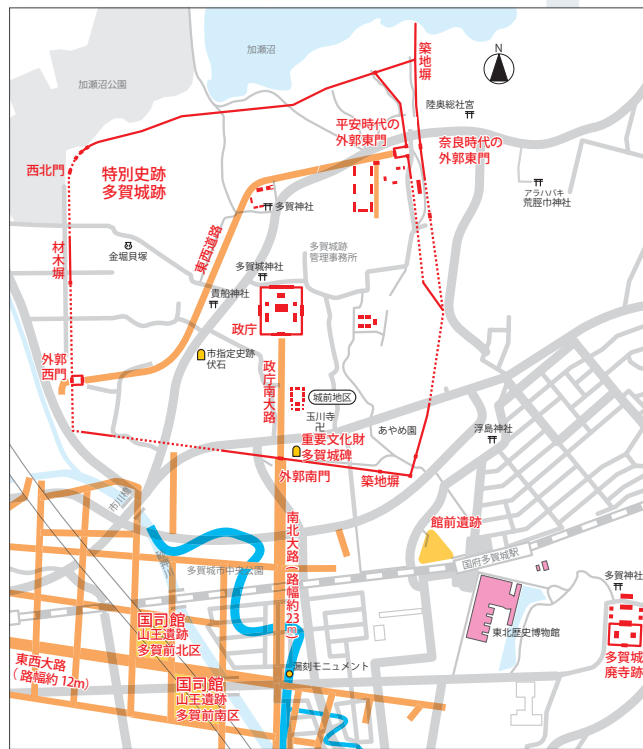


国指定重要文化財 多賀城碑

多賀城南門近くの小さなお堂の中にある「多賀城修造記念碑」で、平城京などから多賀城までの距離や多賀城の創建について刻まれています。江戸時代の初め、この碑が発見されたことにより遺跡が「多賀城跡」であることが判明しました。また、歌枕「壺碑」としても知られており、多くの和歌に詠みこまれています。

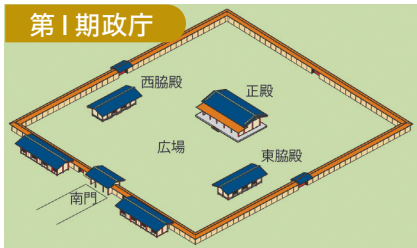
8世紀から11世紀中頃まで古代東北の中心に 多賀城の創建と変遷

多賀城の規模は、約900m四方で、周囲は築地塀や材木塀で囲まれ、南・東・西に門が開いていました。ほぼ中央には、儀式などを行う政庁せいちょうがあり、発掘調査によって奈良・平安時代を通じて4時期の変遷があることがわかっています。城内には、政庁のほか、実務を行う役所や工房、兵士の宿舎などが置かれていました。



多賀城の歩みと政庁の変遷

第Ⅰ期政庁

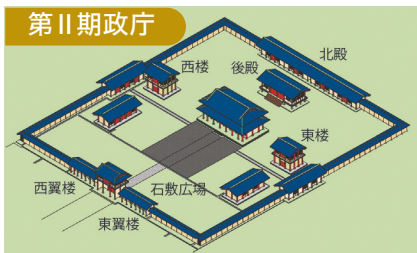


多賀城創建時の姿 神亀元年(724年)

第Ⅰ期政庁 創建724年～大改修762年

大野東人によって創建。正殿・脇殿を築地塀が囲み、南に門が開きます。建物はすべて掘立柱式で、築地塀以外は瓦葺きでした。

第Ⅱ期政庁

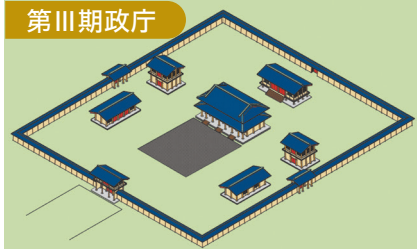


壮麗な景観に大改修 天平宝字6年(762年)

第Ⅱ期政庁 大改修～焼き討ち780年

中央で藤原仲麻呂が権力を持つと、陸奥守として仲麻呂の四男・藤原朝陽を送り込みます。朝陽は蝦夷対策を積極的に進め、雄勝城と桃生城を造営。762年、多賀城政庁を大改修し、全ての建物を礎石式、瓦葺きに改めました。正殿は格の高い四面庇付き建物に建て替えられ、両脇には東西の楼、後方には後殿が建てられました。政庁南門は左右に「翼楼」が付く楼門となり、政庁全体が回廊を巡らせたような景観となりました。広場は石敷きとなり石組み排水溝が敷設されるなど、全期を通して最も機能性と装飾性を兼ね備えていました。しかし、宝亀11年(780年)宮城県北部・栗原郡の長官であった伊治公啓麻呂らが多賀城を焼き討ちし、主要な建物や門はほぼ全焼してしまいます。

第Ⅲ期政庁

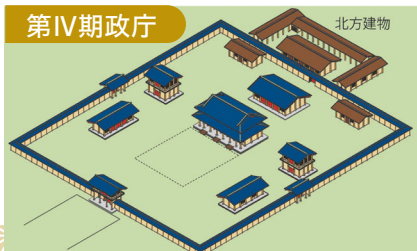


焼き討ちによる焼失からの再建 宝亀11年(780年)

第Ⅲ期政庁 780年～貞観地震869年

焼き討ちによる焼失後、Ⅱ期同様に礎石式、瓦葺きで再建されました。儀式の場である政庁の他に実際に事務を行う「役所」が大畑地区を含め、6か所に設置されるなど、大部分が第Ⅲ期以降に成立、この頃に体制が整備されたことがわかります。

第Ⅳ期政庁



東北歴史博物館所蔵

陸奥国大地震からの復興 貞観11年(869年)

第Ⅳ期政庁 貞観地震869年～11世紀中頃

『日本三代実録』によると、貞観11年5月26日、陸奥国に大地震が発生。建物や城壁が崩れ落ち、多賀城下まで津波が押し寄せ、人的・物的被害が多であったことが記されています。これが東日本大震災とも比較される「貞観地震」です。復興に向けて政府は役人を陸奥国に派遣して被害状況を調べさせたり、翌年には「陸奥国修理府」も置かれています。大宰府にいた新羅国の瓦職人を多賀城に派遣し再建の瓦づくりに従事させ、地元の工人にも伝習させました。地震復興後に再建した政庁では北側に新たな建物が建てられました。



『都市整備』が 多賀城の文化をはぐくむ

多賀城のまち並みの建設は「伊治公皆麻呂の反乱」からの復興に合わせて始まりました。南北大路と東西大路の2つの道路を基準とした道路網が次第に整備されていきます。南北大路は政庁南大路の延長上にあり、道幅は18mで建設されましたがすぐに23mに拡張されています。東西大路は多賀城の外郭南辺から550m離れており、外郭南辺築地塀と並行しています。大路を基準として約110m間隔で道幅3mほどの小路があり、側溝も付けられ川には橋が架けられていました。また、蛇行していた川をまっすぐに改修し運河として使っていたこともわかりました。



画：早川和子



南北大路と東西大路 市川橋遺跡。
大路の交差点から多賀城を見る。

上級役人は広い邸宅を構える

まち並みには多賀城に勤務した1200人以上の役人や兵士の他、多くの庶民が暮らしていました。都から赴任してきた国司などの上級役人は東西大路に面した一等地に大きな邸宅を構えていました。



画：早川和子



くしののめたち
国守館 都の右大臣に馬を贈ったことを示す木簡が出土。

多賀城廃寺跡



多賀城の南東約1.2kmの高崎地区にあり、仏教の力で東北地方の安定を図るために建てられた多賀城の付属寺院です。塔や金堂、講堂などの伽藍配置は、大宰府の付属寺院である観世音寺(福岡県)と共通しています。寺の名前は伝わっていませんが、山王遺跡から「観音寺」と書かれた土器が発見されており、寺名の可能性が高いと考えられています。多賀城跡とともに大正11年に史跡、昭和41年に特別史跡に指定され、史跡公園として整備されました。



東北歴史博物館所蔵



「観音寺」墨書土器
(多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵)

200点以上の灯明皿と一緒に捨てられており、仏を供養する「万灯会」に使われたと考えられる。

鮮やかによみがえる古代東北の栄華

多賀城南門

復元 2019-2024

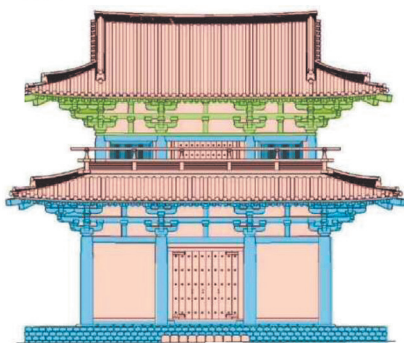
8世紀中頃(政庁第Ⅱ期)に多賀城外郭に設けられた南門(多賀城南門)は、まさに古代東北を牽引する政治・軍事拠点の入口(正門)にあったものです。発掘調査で明らかになった平面規模・構造から考えると、二重門形式の極めて格式高い門であったと推測されています。多賀城創建1300年記念に合わせて復元工事中の南門は、高さ14.5mの荘厳な二重門で、両脇につく高さ4.5mの築地塀も併せて復元されています。丘陵上に突如現れた朱塗りの大規模な門は、蝦夷や北の諸外国の使節団を圧倒するほどの威容を放ったことでしょう。



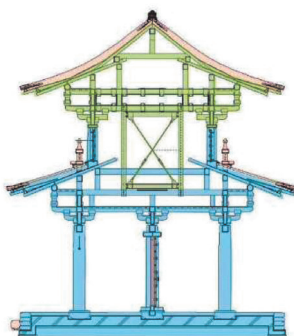
復元のあゆみ

【年度別工事範囲】

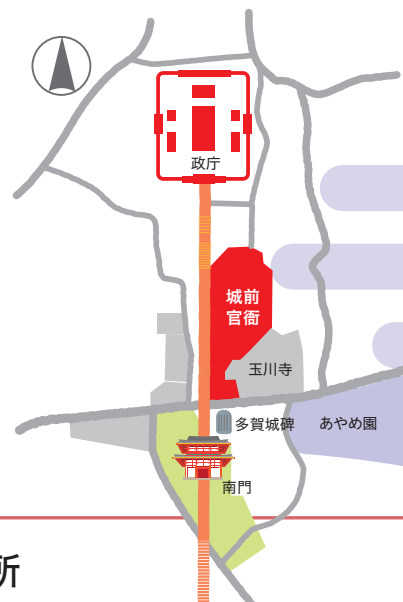
- 令和4年度
- 令和2年度～3年度
- 平成31年度～令和2年度



立面図(南から)



断面図(東から)



【本工事写真】



二重頭貫までの組立完了



二重柱・頭貫と連子窓

【制作中の瓦】



軒丸瓦の型取り



瓦の試作品(左:軒平瓦 右:軒丸瓦)

古代の役所

じょうまえかんが

「城前官衙」プレオープン中

多賀城創建1300年にあわせて、多賀城跡調査研究所が整備を進めている政庁南面地区で、政庁南大路に続き、その東側の「城前官衙」エリアが2022年10月にプレオープンしました。城前官衙とは奈良～平安時代まで役所として使われていた施設で、鎮守府の文書事務を行っていたことがわかる木簡も見つかっています。政庁の変遷に合わせて城前官衙の建物も建て替えられています。



東北歴史博物館所蔵

「多賀国府」の名が記録 中世

源平の合戦を経て12世紀末には鎌倉幕府が開かれ、武士が政治や経済の担い手となり、その後16世紀後半の戦国の争乱が終わるまでの約400年間、東北地方では激しい戦乱が続きましたが、同時に田畑の開発や商業活動が盛んになり、地域間の活発な交流もみられました。多賀城は発掘調査の結果から11世紀中頃には国府としての主要な役割を終えたと考えられています。しかし、その後に書かれた中世の記録には、しばしば「多賀国府」という名が登場します。

八幡のまちと歌枕 江戸時代

江戸時代の多賀城には13の村々がありました。それぞれの村には、藩の直轄地と複数の家臣の知行地が存在しているのが一般的で、屋敷をもって居住していた家臣が13氏あり、その中の最大の家臣は八幡に在所拝領した仙台藩準一家「天童氏」でした。天童氏はもと出羽国天童城の城主で、奥州管領斯波家兼の流れをくむ名門です。10代頼澄の時、最上氏と対立、天正12年(1584年)天童城が落城し、宮城郡西部を所領としていた国分氏を頼って奥州に移り、のち伊達政宗に仕えることとなります。天童氏は八幡村に在郷屋敷を持ち、まわりに家臣団を住まわせていました。その様子は天和元年(1681年)作成の屋敷絵図に明らかであり、現在の八幡のまち割りが江戸時代と大きく変わらないことを示しています。



宮城郡八幡邑天童氏屋敷ならびに家中・足軽屋敷絵図



むつこの
奥ゆかしくぞ
壺のいしづみ
外の浜風
西行(山家集)

壺碑

平安時代の終わりごろから登場する歌枕で、西行や源頼朝の和歌で知られています。

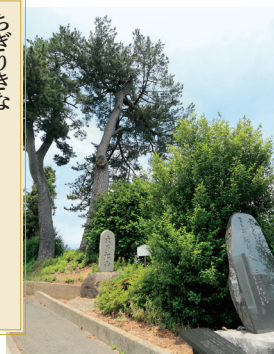
わが袖は
汐干に見えぬ
人こそ知らね
二条院讀岐(小倉百人一首)



興井(沖の石)

末の松山の南、住宅街に囲まれた一画にあり、池とその中の大きな石が目をはきます。

ちぎりきな
かたみにそでをしぼりつつ
すゑのまつ山 なみこさじとは
清原元輔(後拾遺和歌集)



末の松山

宝国寺の裏手、2本の松がそびえる丘が「末の松山」です。最古の勅撰和歌集である『古今和歌集』に初めて登場し、以後みちのくを代表する歌枕として多くの歌に詠まれました。

万葉の歌人

大伴家持と多賀城

宝龜11年(780年)伊治公皆麻呂が多賀城を襲撃・放火するという大事件が起こり、陸奥国は混乱状態に陥りました。この事態の收拾を任せられたのが万葉集に多くの歌を残したことで知られる「大伴家持」でした。天応2年(782年)65歳で多賀城に赴任、按察使兼鎮守將軍、その後、持節征東大將軍に任命され蝦夷対策の全権を担いました。しかし積極的な制圧を行えないまま、延暦4年(785年)8月28日に亡くなりました。官人としては不遇な面もありましたが、歌人として万葉集の成立に果たした役割は大きく、家持の歌は全部で473首が収められています。

あらた新しき 年の始の 初春の
今日降る雪の いや重吉事 (万葉集巻二十 4516)

この歌は家持が最後に詠んだとされる歌で、全20巻の万葉集の最後を飾る一首です。また、この歌の一部はみなさまの吉事を祈念するという意味で、多賀城創建1300年記念オリジナルクラフトビールの商品名にもなっています(P.19)。

大伴の 遠つ神祖の 奥つ城は
著く標立て 人の知るべく
(万葉集巻十八 4096)



おもわくの橋

「野田の玉川」にかかる橋で西行の歌にちなみ、江戸時代、仙台藩によって整備されました。前九年の役で有名な安倍貞任が女性のもとに通うため渡ったことから「安倍待橋」とも呼ばれています。



ふままうき
もみぢのにしき ちりしきて
人もかよわぬ おもはくのはし
西行(山家集)

出典:「多賀城市の歴史遺産」より



万葉文化への誘い 多賀城 万葉デジタルミュージアム

大伴家持や万葉集、まちに点在する歌枕や歴史遺産など、多賀城と万葉文化の世界に身近に触れることができるのが「万葉デジタルミュージアム」です。万葉集を題材とした洋画家・故日下常由氏の作品が堪能できるアートギャラリーでは、古代の情景や当時の人々の情緒の豊かさを感じることができます。多賀城の歴史浪漫探索がより奥深くなるはず!ぜひ活用しましょう。



一步踏み込んでみれば

歴史の奥深さと 出逢える

多賀城めぐり

むつ そうしやのみや 陸奥総社宮

多賀城東門の東側約150mの道路沿いにあります。平安時代の延喜年間、国司が祭事を行うために陸奥国にあった100の神社の祭神を合祀して建立した神社です。江戸時代には、鹽竈神社参詣に先立って、まずこの総社宮に詣でなければ、神の加護が受けられないとされていました。現在の拝殿は江戸時代の享保19年(1734年)に改築したもので、背後に広がる鎮守の森の老杉は樹齢600年を超えるといわれます。



見て、調べて、 体験できる施設案内



◆東北歴史博物館



多賀城跡などから出土した遺物の展示をはじめ、旧石器時代から近現代までの東北地方の歴史を時代別のコーナーで分けた総合展示室、こども歴史館など大人から子どもまで楽しみながら歴史を学べます。広い敷地には大きな池や江戸時代中期の民家を移築した「今野家住宅」もあり、ゆったり散策もおすすめ! JR国府多賀城駅に隣接しているのでアクセスも便利です。

◆多賀城埋蔵文化財調査センター展示室

多賀城市文化センター内にあり、古代の多賀城のまちづくりや人々の営みがわかる「古代都市多賀城」が常設展示されています。発掘調査で明らかになった成果や、市指定文化財となっている「題箋軸木簡」をはじめとした様々な出土資料をもとに、古代都市の様子を紹介しています。ここ数年は山王・南宮地区での大規模な発掘などもあり、速報展・企画展も開催されているのでHPをチェック!



光源氏のモデル?

源融 みなもとのとおる

源融は「源氏物語」の主人公である光源氏のモデルとされている人物の一人で、平安時代に嵯峨天皇の第八皇子として生まれました。陸奥出羽按察使に任命され、この時初めて陸奥国と関わりを持つこととなります。鴨川のほとりに「河原院」と呼ばれた広大な邸宅を構え、鹽竈の風景を模した庭には歌枕「籬ノ島」もあり、難波から海水を運ばせて藻塩を焼かせるなど、風流かつ贅沢極まりない生活をしたと伝えられています。源融が実際に多賀城に赴任したかどうかは定かではありませんが、みちのくの風景を愛でたという伝説はいつしか地元にも根付きました。多賀城近辺には源融の面影が今なお生き続けています。

◆多賀城埋蔵文化財調査センター体験室「多賀城史遊館」



まが玉づくりや火起こしなど、昔の人々の技を体験しながら歴史の勉強ができる『学習施設』です。縄文時代の木の実採りがモチーフのカゴ編み、平安時代の貝合わせの絵付け、多賀城市内から発掘された平安時代の横笛の手作りなど興味深い体験コースがいっぱい! 市内で出土した考古資料や、農具などの民俗資料に触れられる常設展示もあります。

歴なび多賀城

多賀城市内の歴史スポットをスマホなどでナビゲーションするアプリです。ARやVRで在りし日の多賀城政庁正殿や多賀城廃寺が目の前に出現! 古代の遺跡・歌人たちにまつわるスポット、松尾芭蕉の足跡など80箇所以上の歴史遺産を紹介し、GPSを活用して歴史ウォークをサポートします。



歴なび多賀城





多賀城創建記念
TAGAJŌ 1300th Anniversary
724 - 2024

古代浪漫と芸術の風香るイベントに参加しよう！

多賀城創建1300年記念イベント

※(2024年1月1日時点)

2024年8月25日(日)

東北おまつりプロジェクト

東北6県の複数の伝統芸能団体が多賀城跡に集結し、千三百年という悠久の歴史の中で紡がれてきた東北地方のイノチの営みの中にある「いのちのリズム」を和太鼓で、絶えない流れの中にある「動」を踊りで表現することにより、多賀城創建1300年を東北各地の人々とともに賑やかに祝います。東北各地に根付く伝統芸能が多賀城跡に集結し、地元宮城を拠点に活動する和太鼓奏者「Atoa.」と共演します。



2024年11月1(金)午後～

多賀城創建 1300 年記念式典

古代国家形成の上で重要な役割を果たし、宮城のはじまり、東北のはじまりとも言える「多賀城」の創建1300年を多くの方々を迎える記念式典。式典では、古代の行事や儀式を再現、また、不変の価値と移りゆく新たな価値を融合させ、陸奥国府 多賀城の起こりを「naturally な色と音の世界」を通して表現するアーティストックなプログラムが盛り込まれます。千年先の未来に紡いでいく思い、メッセージを発信します。



2024年11月4日(月・祝)

新時代の創作オペラ「多賀城創世記」

テーマは「歴史は未来を教えてくれる」、「ともに生きる」。歴史は断片的に存在するのではなく過去のいずれの時ともつながって今があり、未来へとつながっています。多賀城の創建まで、そして、創建からの1300年。連綿とこの土地に刻まれてきた「記憶」を、交響楽と映像と歌で綴る新時代の創作オペラ。市民参画のもと、プロ・アマ共同で公演します。



2024年11月22日(金)～24日(日)

「The Winter's Tale - みちのおくの国の冬物語」

テーマは「喪失と再生」、「生きる喜び」、「多様にあふれた未来」、「希望」。陸奥国府多賀城が創建された古代の東北地方を舞台にウィリアム・シェイクスピアの「冬物語」を「みちのおくの国の冬物語」として翻案し公演します。市民参画のもと、東日本大震災の被災地で暮らす人々が生きている喜びを感じ、これから生きる“よすが”(拠り所、手がかり)となるものを創発します。



多賀城創建1300年記念事業の様々な情報はコチラからご覧いただけます。



特設サイト



Facebook



Instagram



X(旧ツイッター)

市特産品「古代米」

多賀城 しろのむらさき
多賀城跡からは、「黒春米」と書かれた木簡が遺物として出土しており、多賀城でも遠い昔から米が作付けされていたことが伺えます。この歴史的背景を受け、稲の原種に近い「古代米」を多賀城市の特産品に認定しました。さらに、多賀城市観光協会では「しろのむらさき」という独自のグルメブランドを立ち上げ、古代米を使った様々な商品開発が進められており、古代米を使った商品を提供するお店は年々増え、盛り上がりを見せています。また、小学生をはじめとする地域の方々に向けた、古代米が田んぼから食卓に並ぶまでを学ぶ「古代米学習プログラム」も行われており、多賀城への郷土愛が「古代米」から育まれていきます。



多賀城創建1300年記念
オリジナルクラフトビール

「いやしけよごと」

多賀城の特産品である古代米と多賀城市内で採蜜された蜂蜜を使用して開発したオリジナルクラフトビール「いやしけよごと」が発売されました。「いやしけよごと=いや重け吉事」は、万葉集の締めくくりにある大伴家持の和歌から取ったもので「年が改まるその良き日に降る雪のように、良いこともたくさん降り積もりますように」との願いが込められています。ビールは琥珀色の深いコクの中に広がる花のような香りとさわやかな苦みが特徴です。



レゴブロック約9500個の大作！

レゴ多賀城南門

『レゴ多賀城南門』は「東京大学レゴ部」の協力によって制作した1/20スケールの作品で、使用したレゴブロックはなんと約9500個！これまで地元のJR多賀城駅や市役所、東北歴史博物館や図書館などで展示。東北の空の玄関口・仙台空港や宮城県庁、JR仙台駅にもお目見えし、多賀城創建1300年と南門復元をPRしています。

「史跡のまち」を巡ってみよう！ 多賀城周遊モデルコース

ドライブコース



START!

◎三陸自動車道 多賀城 IC

A 山王遺跡

平安時代中頃(10世紀前半)に、都から陸奥国府に赴任した国守の館跡です。



B 多賀城政庁跡 (南門見学)

8世紀中頃(政庁II期)に多賀城外郭に設けられた南門や国指定重要文化財の多賀城碑は必見です。



C 多賀城廃寺跡

東北地方の安定化を図るために建てられた多賀城の付属寺院です。



D 東北歴史博物館

多賀城跡から出土した遺物の展示をはじめ、大人から子どもまで楽しめる博物館です。



E 多賀城市立図書館

(万葉デジタルミュージアム)

「家」をコンセプトに、誰もが行きたくなる環境や居心地の良い空間です。



F 興井(沖の石) (歌枕)

末の松山の南に位置し、直径20メートルほどの池の中に岩が露出しています。



G 末の松山 (歌枕)

宝国寺の裏手、2本の松がそびえる丘で、みちのくを代表する歌枕の地です。



H 貞山運河

岩沼市の阿武隈川河口から松島湾を経て、石巻市の旧北上川に至る国内最長の運河です。発案者の伊達政宗の法名「貞山」にちなんで貞山掘と呼ばれ、運河としての使命を終えた後も広く親しまれています。



I 大代横穴墓群

飛鳥時代から奈良時代にかけて造営された地元豪族の墓地です。山の斜面に掘り込まれた横穴状の墓室からは、金銅装頭椎大刀が出土し、中央政権とのつながりが想像できます。



J 八幡神社

坂上田村麻呂が勧請したと伝えられる神社です。元は末の松山のある丘陵上にあり、八幡氏がその地に拠点を置いたことから、現在の場所に遷宮したと伝えられています。



GOAL!

◎三陸自動車道仙台港北 IC

仙台港周辺には、ショッピングセンターや仙台うみの杜水族館などのレジャー施設も多くあり、家族連れでも楽しめます!

歴史も！グルメも！映えスポットも！ 仙台・松島エリアよくばりモデルコース

1泊2日コース

9:30～ 伊達政宗公とその文化を知ろう！

◆仙台北城跡(青葉城址)

天然の要害・青葉山に建つことから「青葉城」とも呼ばれる仙台北城。仙台北藩祖・伊達政宗公によって築城されました。現在は石垣と再建された大手門脇櫓が残るのみですが、政宗公が見たであろう仙台市街の眺めを体感できます。天守台に立つ「伊達政宗公騎馬像」は2022年3月の地震で被害を受けましたが、約1年をかけ修復されフォトスポットとして復活しています！

◆詳しくは/P.054 仙台・松島エリアへ



1日目

10:30～ ◆瑞鳳殿

伊達政宗公が眠る霊廟です。元々あった建物は戦災で焼失しましたが後に復元。二代忠宗公の感仙殿、三代綱宗公の善応殿があり、資料館では発掘調査で出土した遺骨や副葬品を展示、解説しています。2023年、本殿や政宗公御木像の綺麗な彩色を取り戻すための修復工事が完了し、桃山様式の鮮やかな姿を取り戻しました。

◆詳しくは/P.054 仙台・松島エリアへ



12:00～

焼きたて厚切り牛タンをほおばりたい！

◆仙台市内で「牛たん」ランチ

仙台に来たならやっぱり美味しい牛タンは外せません！多くのお店では「牛たん定食」として、厚切りの牛たん焼き、麦飯、テールスープがセットになって出てきます。お店によってタンの味付けや熟成方法、厚み、焼き方が違うのも楽しみのひとつ。年々牛タン料理のパリエーションも多彩になっていて、牛タンカレーや牛タンラーメンなどのメニューも注目です。



13:30～

◆アクアイグニス仙台

2022年にオープンした癒しと食を楽しむ大型複合施設。地下1000mから湧出する日帰り温泉「藤塚の湯」や地元の野菜などが並ぶマルシェ、パティスリー、ベーカリー、和食とイタリアンで、東北・宮城の食材を使ったメニューを提供しています。自分らしい楽しみ方でひとときの癒しタイムを…。 ◆詳しくは/P.064 仙台・松島エリアへ



15:00～

◆多賀城『歴史散策』

多賀城創建1300年イヤーの2024年は、様々なイベントを行っている「多賀城」をぜひ巡ってみましょう。何とんでも復元される「多賀城南門」は必見！史跡のまちは古代浪漫の痕跡が多く遺り、文学好きな方には歌枕を散策するルートもおすすです。6月中旬～下旬には「多賀城跡あやめまつり」が開催され、約800種300万本のあやめ類が見事に咲き誇ります。



松島エリアで

宿泊



2日目

9:00～ ◆『松島』観光

260余りの島々からなる「日本三景・松島」。『映えスポット』に事欠かない風光明媚な景観が広がり、「松島四大観」や「西行戻しの松公園」などの名所が有名です。また、遊覧船で松島湾をぐるりと島巡りすることもできます。松島グルメを堪能できる飲食店やお土産屋さんも充実していて、笹かまぼこの手焼き体験もできます。

◆詳しくは/P.082 仙台・松島エリア



12:00～ ◆塩竈市内散策

塩釜港は古くは国府多賀城への荷揚げ港として、藩政時代には伊達藩の港として発展。現在では日本有数の生マグロの水揚げ量を誇ります。また、新鮮なネタが自慢の「すしのまち」としても有名です。活気あふれる塩釜水産物仲卸市場では買った海産物で『マイ海鮮丼』も食べられます。お土産には塩竈が蔵元の地酒もおすすめ！

◆詳しくは/P.086 仙台・松島エリアへ



みやぎの歴史にふれる旅

宮城の長い歴史に深く関わっている為政者と城跡、時代の証人となってその文化を現代に伝える神社・仏閣を中心に、今訪れたい『歴史スポット』を紹介します。

お城好きにおすすめ!

みやぎの城と城下町

◆仙台城跡(青葉城址)

関ヶ原の戦いのさなか、伊達政宗公は徳川家康に築城の許可を求め、慶長5年(1600年)12月に城の「縄張り始め」を行いました。翌年の慶長6年(1601年)より普請に着手、慶長7年には一応の完成をみたとされています。仙台城に天守が作られなかったのには諸説ありますが、城の立地が『天然の要塞』のため必要がなかったことや家康公に敵意がないことを示すためともいわれています。代わりに城の中心に、俗に「千畳敷」ともいわれる広大な大広間を設けました。

仙台城には「五城楼」という別名もありますが、これは唐の詩人の七言律詩の一節『仙臺初見五城楼』に由来し、政宗公が仙人の住むような高台に風雅な理想郷を作りたいかかったのではともいわれます。政宗公の死後、二代藩主忠宗公は山麓部に二の丸を造営し、幕末まで二の丸が藩政の中心となりました。明治の廃藩置県後は、そこに軍の施設が置かれ、明治15年(1882年)の火災によりその建物のほとんどが焼失しました。現在は石垣と土塀、再建された大手門脇櫓のみが残されています。 ◆詳しくは/P.054 仙台・松島エリアへ



◆岩出山城址



伊達政宗公は天正19年(1591年)に豊臣秀吉の「奥州仕置」により米沢城(山形県米沢市)から岩出山(宮城県大崎市)に移封されました。それまで『岩手沢城』と呼ばれていた城は、東北に来ていた徳川家康によって修復され、政宗の新しい居城とするよう勧められたといわれています。名を岩出山城と改め、仙台城を築城するまでの12年間居城としました。その後は四男・宗泰(知行高1万4600石余)に与えられ「岩出山伊達家」が誕生しました。現在は城山公園として整備され、土塁、空堀などの遺構が見られます。

◆詳しくは/P.141 県北エリアへ



旧有備館および庭園

有備館は「岩出山伊達家」が開設した郷学(学問所)です。岩出山城北側の隠居所・下屋敷の敷地内に嘉永3年(1850年)ごろ開設されました。現存する有備館の「御改所(主屋)」は、二代宗敏の隠居所として建てられた可能性が高く「対影楼」と呼ばれました。明治維新後には岩出山伊達家の居宅となり、庭園とともに守り伝えられてきました。昭和8年、「旧有備館および庭園」として国の史跡及び名勝に指定、昭和45年、岩出山町(現大崎市)に移管され、一般に公開されています。



◆白石城

天正19年(1591年)豊臣秀吉は、伊達氏の支配下にあったこの地方を没収し、会津若松城と共に蒲生氏郷がもうじさとに与えました。この時期、蒲生の下で白石城が本格的に築城されたといわれています。蒲生氏郷の亡き後、白石城は上杉氏が城主となっていましたが、家康と上杉景勝が戦う際に、家康側の伊達政宗公が上杉氏から白石城を奪い返します。この「白石城の戦い」によって、9年ぶりに白石が伊達の領地となりました。その後、政宗公の家臣の片倉小十郎景綱が城主となり、以後260余年間片倉氏の居城となりました。戊辰戦争時には新政府軍に対抗した「奥羽越列藩同盟会議」が行われ、歴史の転換期に重要な役目も果たしました。明治7年に解体されましたが、平成7年に三階櫓(天守閣)と大手一ノ門・大手二ノ門が復元されました。2021年、2022年と2回の地震により被害を被りましたが8ヶ月に渡る復旧工事も終了、見学が再開されています。

◆詳しくは/P.107 県南エリアへ



片倉小十郎景綱

初代片倉小十郎景綱は姉の喜多が伊達政宗公の乳母ということもあり、兄弟のように育ったと伝わります。政宗の父・輝宗に見出され、政宗が青年となり伊達家当主となると、景綱も知勇兼備の参謀役となり終生仕えました。『小田原征伐』時、豊臣秀吉との徹底抗戦を止めたともいうエピソードも有名です。徳川幕府が慶長20年(1615年)に出した「一国一城令」の後も仙台城と白石城があったのは、家康が景綱を認めていたからとも言われています。

◆涌谷城跡



伊達政宗公は岩出山城に入るとともに、家臣にも転封を命じました。巨理わたり重宗しげむねは伊達氏の重臣で、陸奥国巨理郡巨理の城主。遠田郡百々城を与えられ巨理から移りましたが、直後に地の利のよい「涌谷城」に移りました。以後、息子の定宗が伊達姓を名乗ることが許され、2万2600余石の「涌谷伊達家」の要害屋敷となりました。現在は「城山公園」として整備され、桜の名所として知られています。また県内唯一の城郭遺構とされる隅櫓(太鼓堂)

の隣には、天守閣を模した涌谷町立史料館が建てられ、寛文事件の資料や長根貝塚・追戸横穴古墳群からの出土品などが展示されています。

伊達安芸宗重公と 寛文事件

歌舞伎や小説の題材ともなった伊達騒動(寛文事件)は、伊達定宗の息子・伊達安芸宗重(だてあきむねしげ)公が非業の死を遂げた出来事です。仙台藩三代藩主・伊達綱宗が幕府により隠居を命じられ、わずか2歳の亀千代が四代藩主に。伊達兵部(綱宗の叔父)と田村右京(綱宗の兄)の二人が後見人となります。しかし伊達兵部が原田甲斐らと結び藩政を牛耳るようになります。そのころ涌谷と登米の間で境界争いがあり、宗重公は仙台藩に訴えますが納得のいく回答が得られず、ついに幕府に対して兵部の悪政を告白し訴状を提出。寛文11年、詮議の途中で突然原田甲斐によって斬り付けられ命を落としました。宗重の身命を賭けた訴えは幕府に通じ、仙台藩は安泰となったのです。



高い美意識が 今も息づく 伊達な文化

初代仙台藩主・伊達政宗公。奥州の覇者となり、仙台藩発展のため治水工事や植林、城下町の整備に邁進しました。また『文化人』としても時代を牽引。奈良時代の陸奥国分寺跡に薬師堂を建てたり、松島の名刹円福寺を瑞巖寺として復興したり、地元の名所・旧跡の再生に力を入れました。当代一の技術者を呼び寄せ、上方の桃山文化を取り入れたり、西洋世界にも関心を寄せました。伝統の中にも個性的で新しい“伊達”な文化を開花させた功績は、今でも県内の様々な遺構に息づいています。

◆瑞鳳殿



仙台城の本丸跡と向かい合う経ヶ峯に位置する政宗公の霊廟です。桃山文化の遺風を伝える豪華絢爛な廟建築として国宝に指定されましたが、1945年の戦災により焼失しました。現在の「瑞鳳殿」、二代忠宗公の「感仙殿」、三代綱宗公の「善応殿」は1974年～1985年にかけて再建されたもので、いずれも焼失前の様子を再現しています。また、資料館では発掘調査で出土した遺骨や副葬品を展示・解説しています。2001年に仙台開府四百年を記念し

て大改修が行われ、柱には彫刻獅子頭を、屋根には竜頭瓦を再現。さらに2023年には本殿や政宗公御木像の綺麗な彩色を取り戻すための修復工事が完了し、鮮やかな姿を取り戻しました。経ヶ峯は伊達家の霊域であったため、藩政時代そのままの自然環境が現在まで維持されており、老杉の巨木が立ち並ぶ参道には静謐な時間が流れています。

◆詳しくは/P.054
仙台・松島エリアへ



◆大崎八幡宮

平安時代の坂上田村麻呂、また室町時代の奥州管領・大崎氏にゆかりのある大崎八幡宮を、伊達政宗公が居城の岩出山城内にご神体を遷し、後の慶長12年(1607年)現在の地に創建しました。社殿は手前の拝殿と奥の本殿を石の間と呼ばれる部屋で繋いだ日本最古の『権現造』。黒漆塗に彫刻や彫金具が施され、荘厳華麗な安土桃山時代の文化を伝える国宝建造物です。平成16年、約5年に渡る社殿の保存修理工事を終え、創建当時の極彩色が甦りました。

◆詳しくは/P.056 仙台・松島エリアへ



◆瑞巖寺

天長5年(828年)慈覚大師によって開山されたと伝わる瑞巖寺。現在の建物は慶長14年(1609年)伊達政宗公が5年の歳月をかけて完成させたもので、伊達家の菩提寺としました。国宝に指定されている「本堂」は入母屋造・本瓦葺、桃山様式の優美さにあふれ、10室からなる部屋それぞれに見事な襖絵が描かれています。また、禅宗寺院の台所である「庫裡」は妻飾りの彫刻白壁と木組が美しいコントラストを見せてくれます。



平成30年には10年に及ぶ「平成の大修理」が完了。現在まで一度の火事もなく、桃山美術を今に伝える貴重な建築物です。

◆詳しくは/P.082
仙台・松島エリアへ



◆円通院



伊達政宗公の嫡孫、光宗公が19歳の若さで死没。その死を悼んだ父・忠宗公により円通院が開創、お霊屋(三慧殿)は正保4年(1647年)に完成しました。東北では数少ない格式ある方三間霊屋の遺構であり、3世紀半もの間秘蔵とされた国の重要文化財です。その厨子には支倉常長が西洋から持ち帰ったと伝わるバラや水仙の花の絵が鮮やかに描かれています。バラの花はローマ帝国のローマを象徴し、水仙はイタリア・フィレンツェ市を表す花とされ、支倉常長がローマ、フィレンツェを訪ねた証として描かれたと伝わっています。また庭園も見どころの一つで、約350年前に造られた心字の池を中心とした石庭やバラ園、ライトアップされた紅葉など四季折々の美しさで魅了します。

◆詳しくは/P.084
仙台・松島エリアへ



◆鹽竈神社

鹽竈神社は奈良時代より以前に創建されたと考えられています。平安時代初期に書かれた「弘仁式」には「鹽竈神を祭る料壺万束」とあり、陸奥国の「総鎮守」として多くの人々に信仰されてきました。現在の社殿は仙台藩主第四代・伊達綱村公から第5代の吉村公に渡り、9年の歳月を掛け宝永元年(1704年)に建立されたものです。塩竈市と松島湾の鳥々を見晴らす高台にあり、境内には国指定重



要文化財の社殿14棟と石鳥居が鎮座します。春には古くから歌にも詠まれた「鹽竈桜」が八重の花を咲かせます。

◆詳しくは/P.086
仙台・松島エリアへ

